

他人の人権を守ることが自分の人権を守ること

# 今、人権・同和対策・教育は 様々な人権問題解決へ広がる

# つなぐ

小郡市議会議員 しんばる善信後援会だより

発行  
しんばる善信後援会  
小郡市小郡1304-2  
0942-73-2123



## 水平社宣言から100年 今も残る部落差別

大正11年、あからさまで過酷な差別に対し、自らの運動で差別をなくそうと立ち上がった被差別部落の人たちがいました。水平社です。その宣言には、自分たちが求めるのは、上から目線の憐み<sup>あわれ</sup>や施し<sup>ほし</sup>ではなく、同じ人間としての尊敬だとあります。今年はそのから100年です。これまでの運動、行政施策などにより部落差別はいぶん解消しましたが、今もネット上などで新たな差別が繰り返され、その解決は行政の課題となっています。

### 部落差別の他にも 多くの人権問題が

現在、小郡市のみならず全国で「戸籍・住民票等の不正取得事件」や「土地差別調査事件」、「インターネット上での差別情報の氾濫」など様々な部落差別事件が発生しています。

また、同様のことが障がい者、女性、外国人、性的少数者などへもなされ、解決が課題となっています。

### 不正防止のため 本人への通知制度導入

小郡市では「戸籍・住民票等の不正取得事件」を受け、平成24年に「住民票の写し等の不正取得に係る本人通知制度」を制定しています。この制度は、不正取得があった際に本人に通知することで、被害の拡大防止を図るとともに、犯罪発生を抑制することを目的としています。

### インターネット上の差別 情報を監視 削除要請

インターネットの普及に伴い、部落差別をはじめとする様々な差別的情報が氾濫するようになりました。小郡市では、このような差別書き込みを早期に見出し拡散防止のため、令和元年より、複数のサイトを定期的にモニタリングしています。差別書き込みを発見した場合には、必要に応じてサイト管理者に削除要請を行っています。

### 差別解消のための必要な 事業継続は自治体の責務

5月、西日本新聞は九州7県と全233市町村に同和行政・人権啓発に関するアンケートを実施しました。それによると多くの自治体が事業を縮小する一方、25自治体が必要と判断した事業を継続しています。小郡市では、教育・健康福祉分野で約188万円分(予算)の事業を継続しています。

### 小郡市の人権のまちづくり

小郡市が特に大切にしてきたのは、「同和問題を解決するためには、地域に住むすべての市民の人権が守られていなければならない」という考えです。これが「人権のまちづくり」です。部落差別だけでなく地域にある様々な人権問題に対して住民自身が気づき、解決に向けて力を合わせて行動していこうとするものです。

### まず、踏まれた者の痛み を知ることから

人はだれでも、周りからのけ者にされ、悪口を言いふらされれば、深く傷つき生きる力さえなえてしまいます。一方、加害者は、自分がだれかを差別し傷つけている自覚はあまりありません。気づくのは、立場が逆転して自分が被害者になったときです。だから、ときどき「もし自分が差別される側だったら」と考えてみるのがとても大事です。

# 共に学び、共に生きる理想を模索

## 特別支援学級急増で新たな課題

### 教室、指導者が足りない

	平成24年	令和4年
小学校児童数	62	290
中学校生徒数	21	100
合計	83	390
小学校学級数	15	56
中学校学級数	10	21
合計	25	77

特別支援学級、児童生徒数の変化

#### 特別支援学級、小・中学校に77学級

近年、市内の小中学校の特別支援学級が急激に増えています。一番多い小学校では、全部で44学級のうち通常学級30に対し、特別支援学級が14です。様々な「障がい」を持つ子どもたちに対し、一人ひとりに最適の指導を行うというのがその目的です。ただ、その増え方が急なため、教室や専門の先生の不足が起きています。また、支援学級の子もたちが、交流（親）学級の子もたちと一緒に学習し生活する上で、子ども同士の関わり方や指導者間の連携協力の難しさが出てきています。しんばる議員は小郡市内小中学校の現状を質問しました。

10年で、学級数3倍  
人数は5倍

保護者の理解進み、  
入級希望増える

以前、障がいを持つ子どもたちは、地元の学校にある特殊学級か養護学校に就学していました。ここでは、どうしても地域の子もたちから切り離されがちでした。その後、障がいのあるなしにかかわらず共に学び、共に生きるというインクルーシブ教育の考えが浸透して来ため、国は親や本人の希望を優先して就学先を決められるようにしました。その結果、学級数が増加しました。

#### 個別指導と共同学習 どちらも大事

支援学級で一人ひとりの子どもの状況に応じマンツーマンで学習することも交流学級でみんなと一緒に学習することも、どちらも大事です。特に共同学習では、子ども同士が互いにかかわる中で自然に共に生きる感性や態度が育ちます。そのためには支援学級と交流学級の担任同士のきめ細かい協力がが必要です。

#### 条件整備が追い付かない

「共に生き、共に学ぶ」というインクルーシブ教育の理念そのものは進めるべきです。しかし、そのためには、もつと多くの教職員と教室が必要です。それらが不十分なまま、学級数だけが増え続けているところに根本的な問題があります。それに、もともとある教員不足や多忙化のなか、連携協力するゆとりなど持てないとの声も聞かれます。

#### 免許保有者はわずか

障がいを持つ子どもの指導には専門的知識や技能が求められます。必ずしも免許が必要ではありませんが、現在、支援学級担任で養護学校教諭免許保有者は、小学校14%、中学校9%です。今後、どうやって指導者を養成するか国レベルでの取り組みが必要です。

#### 支援員の有効活用を

小郡市教育委員会は、小中学校で支援の必要な子どもたちのために「特別支援教育支援員」を83人配置しています。その役目は、支援学級の担任をサポートし、特性が異なる児童・生徒を支援していくことです。人数が増えたのはいいのですが、支援員の研修や職員間の情報共有が足りていません。改善に向け支援員から直接意見を聞くよう求めたのに対し、市教委も協議の場を持つと答えました。

# 味坂インター（仮称）周辺 冠水をどうやって防ぐか

## インター完成は 令和5年なのに・・・

今、福童南の浄化センターそばに味坂インター（仮称）建設が急ピッチで進められています。令和5年完成の予定です。しかし、インターができて周辺は毎年大雨で水につかる所です。最近の集中豪雨では、道路冠水で通行止め、浄化センター下水管マンホールからの汚水噴出が起きています。また、開発により近くの団地への浸水も心配されています。このままでは企業誘致どころではありません。

## 上流から入る水を減らし、 排水能力を上げる

計算では、開発面積60ヘクタールのうち3分の1に当たる20ヘクタールに深さ



3mの調整池が必要とも言われています。とてもできる話ではありません。ではどうするか。専門家に委託して調査検討してもらうことになり、排水処理計画策定費2064万円が予算化されました。

## 市の電気代、契約変更 で7600万円不足

### 燃料高で事業から撤退

小郡市は、数年来、市役所はじめ学校などの公共施設の電気供給を九電より安いウエスト電力と契約してきました。ところが、最近の燃料代高騰によりウエスト電力が事業から撤退することになり、5月以降、再び九電と契約することになりました。このため電気代が7673万円足りなくなり、6月補正予算に追加計上しました。

## 契約不履行でウエスト電力から和解金

市は、弁護士を通して契約不履行に伴う損害賠償をウエスト電力に求めてきました。しかし、ウエスト電力の経営状況等から和解金約2000万円で和解する判断をし、臨時議会で承認されました。

## ひとり親家庭等、 子ども一人5万円支給

### 物価高への国の支援

新型コロナウイルスの影響でひとり親や低所得の子育て家庭の困窮が深刻です。それに最近の物価高が追い打ちをかけています。国は、これらの家庭を支援するため子ども一人当たり5万円を支給することを決めました。小郡市では、570人を想定しています。

## 300円相乗りタクシー 運行内容を改善

### 市内全部の病院OK

昨年10月から立石、御原、味坂校区で始めた300円相乗りタクシーがより利用しやすくなりました。これまで校区内の病院だけでしたが市内全部に拡大しました。また、自宅から目的地だけに制限されていたのが、2つの目的地間でも利用できるようになりました。

## 給食食材費値上げ分 市が補助

### 給食費値上げ当面回避

最近、給食の食材費が値上がりしています。このままでは給食費（現在の月額、小学校4200円、中学校4900円）を値上げせざるを得ません。

そこで、小郡市は、保護者負担を少なくするため、来年3月までの値上がり相当分およそ2223万円を補助することにしました。

## 区長謝金改定の方針

小郡市は、これまでの区長への委嘱事務を見直し、その一部を行政区に委嘱することとしています。それに伴い5年度から、謝金を区長個人と行政区に配分する予定で現在区長会と協議を行っています。

### この1さつ



同志少女よ、敵を撃て  
逢坂 冬馬 著

# 5期目の議席 子どもたちに夢と希望を残したい 議会への期待にこたえる

4月24日、市議会議員選挙が行われ、5期目の当選を果たすことができました。49歳で小学校の教員から議員になり、既に16年が過ぎました。どれだけ市民の役に立ってきただろうかと振り返っています。その時々にはできることを精いっぱいやったつもりですが、足りなかったこともたくさんあります。教員をしていたとき子どもたちに言ったことば「自分が今やろうと思えばできることをやった者が本当の英雄だ」を何度も思い起こします。いつの間にか、18人の議員の中で古い方から3番目になってしまいました。この間、議会改革に関わり、まだ道半ば、それを根付かせるのが当面の仕事です。

## 副議長になりました

5月16日、選挙後初の臨時議会で、副議長に選ばれました。これからは議会全体の動きや活性化に目を配り責任を負う立場です。市民が安心して気持ちよく暮らせるよう議会は何をなすべきか。議員みんなで活発に議論し、政策提案できる環境、雰囲気をつくってきたいと思っています。

## 意見の違いを認めるのが民主的議会

市民一人ひとり、いろんな意見を持っています。議員はその代表です。当然最初の意見はバラバラです。でも、話し合って一つの政策を決めなければなりません。そのため、互いに相手の意見をしっかりと聞き認識を修正し、よりよい合意点を見出すよう努力しなければなりません。

## 情報量が違う

副議長になって、俄然、<sup>がぜん</sup>情報量が増えました。小郡市だけでなく、全国、近隣自治体の動きが様々な形に入ってきます。何事も情報のあるなしで判断が分かれ、情報量が人の行動判断に大きく影響していることを実感しています。だからこそ議会で議論する上で情報の公平性、公開性が大切だと再認識しています。

## 議会の役割

### 議員の発言の重み

議会での質問を聞いていて、たまに「あれっ」と疑問に感じる場合があります。根拠があいまいだったり、思い込みだったり、時には、明らかに間違いだったりします。振り返ってみれば自分自身にもあることで、言った後、しまったと思います。時には、おかしさを指摘され、謝ることもあります。そもそも、議員の発言は、だから束縛されず自由です。でも好き放題を言ってもいいということではありません。法律では「無礼の言葉を使用し、または他人の私生活にわたる言論をしてはならない」とだけあります。しかし、どの発言も市民や関係者から不明な点や疑問を問われれば、本人が説明する責任があるのは当然です。それくらい議員の発言には重みがあるということです。(よし)

第2次大戦中、ナチストイッパに侵略されたソ連では、兵員不足のため百万人を超える女性兵士が銃を手に前線に戦いました。これは狙撃兵として数多くのドイツ兵を倒した一人の若い女性兵士の物語です。戦場での

過酷な体験と戦後も続いた女性ならではの苦しみを描き、戦争がいかに人間性をボロボロにし人生を壊すか突きつけてきます。そこにわずかに見出す希望、信頼できる人の存在。この話は、ベラルーシのノーベル賞作

家スヴェトラナ・アレクセエヴィチの「戦争は女の顔をしていない」を土台にしています。連日ウクライナの戦争報道に接するたび、今、まさに現在進行形で同じ悲劇が繰り返されていることに胸が痛みます。